

最優秀賞 「プチトマトの涙」

橿原市立橿原中学校 1年 大枝 里奈

「ただいまあ。」

「おかえり。お弁当美味しかった？」

母は、夕食の準備をしながら玄関の私に声をかけた。私は、靴を脱ぎながら、母に大きな声で返事をした。

「食べたあ。でも何で私のキライなプチトマト入れるん？食べるとき、はきそうになったわ！！」

と言った直後、台所からの返事がない――。しまった、言いすぎた……。と後悔したのも後の祭り、母は返事もせず、うつむいてトントンと野菜を刻んでいた。

空の弁当箱とはしを流しに運び、チラリと母の顔を横目で見ると、少し目が赤い。泣いている！？私は、自分の言葉を悔やんだ。

今日は、年に数回の行事によるお弁当持参の日。大好きなグラタンや、アスパラのベーコン巻きなど、彩りよく入っていたが、お弁当の隅っこには、申し訳なさそうに、それでいてかわいい、まんまるでつやつやのプチトマトが一つ、コロンと入っていた。ふたを開け、プチトマトと目が合った。“やだなあ。入ってる”でも、食べるしかないっ！！と目をつむってパクッ。プチッとした食感と、甘酸っぱい味が口に広がって、好きでない私は涙目になった。そんな気持ちも知らずに、母は私の苦手なプチトマトを入れて、少し私は怒っていた。そう、まだその時は、お弁当を作ってくれる、料理を作ってくれる人の気持ちなど、全く考えたこともない身勝手な自分に気づいていなかった。

私は、食べることも好きだが、料理をすることも大好きだ。休日には、ご飯を作ったり、小腹がすけば、簡単なおやつ作りもする。ノートを作り切り抜きやコピー、はたまたパソコンから入手したレシピを写し、まとめている。だんだん分厚くなっていくノートが今の私の宝物だ。

先日、お腹のすいた私は、簡単なパンを作ろうと思いたち、台所に立った。美味しくできたものの、食べきれず、残りの材料を冷蔵庫へ…。そのうち食べようと思いつつ、日にちが過ぎた。母に言われ、忘れていたことを思い出した。大丈夫か気にはなったが、捨てられない。そうだ、私が作ったからだ。母には、もう処分しなさいと言われた時、何だかむしように悲しくなった。これだ、私はハッと気が付いた。

プチトマト…。これは母が庭で育てたプチトマト。毎日、母は嬉しそうにプチトマトに話しかけながら水やりをして育てていた。

食べ物を育てる、母は作るのも上手い。私は、食することで育てられている。それは、そのものの命をいただくということだけでなく、作ってくれた人の気持ちもいただいているということだ。私は深く反省し、今度母の誕生日にプチトマトを使った料理を作ってあげようと心に決めた。